

第 55 回目 パウロの個人的な祈りの要請

はじめに

【新改訳改訂第 3 版】エペソ人への手紙 6 章 19～20 節

19 また、私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるように私のためにも祈ってください。

20 私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。

●このテキストにはパウロの個人的な祈りの要請が記されています。「祈ってください」と繰り返して書かれています。その内容は、福音を宣べ伝える上で、

- (1) 適切な言葉(語るべきことば)
- (2) 語るべく大胆さ

が与えられることを願っています。パウロは、自分の健康のために、生活のために祈ってほしいと言っているのではありません。福音を語る上で、適切なことばを、そしてもうひとつ(これが今回、特にお話したいことですが)、「大胆に知らせることができるように、大胆に語れるように」祈ってほしいと言っているのです。この祈りが、パウロのみならず、私たちクリスチャンにとって、いかなる意味をもっているかが今回のメッセージなのです。

●使徒パウロは、キリストに出会う前は厳格なパリサイ人で、熱心な律法学者でした。言うなれば、聖書(旧約聖書)の教師(ラビ)だったのです。当時、人々からも尊敬され、最も権威のあったガマリエルという律法学者の門下に入って律法を学んでいました。そのパウロがダマスコ途上でキリストに出会ったことにより、彼はコペルニクス的転換を経験します。それまで彼は、キリストを信じる者たちを熱心に迫害していましたが、今度はキリストの福音を熱心に宣べ伝える側の一人となったのです。その彼が、生涯の晩年に、自分が三年余り、謙遜の限りを尽くし、数々の試練の中で、夜も昼も、涙と共にひとりひとりを教え続け、まさに手塩にかけて建て上げたエペソの教会の人々に、ぜひ、自分のために祈ってほしいと要請しているのです。

1. パウロの置かれていた環境

●エペソ人への手紙はパウロがエペソの教会に宛てた手紙ですが、それは当時の世界の中心と言われた大都市ローマから送られた手紙です。パウロはローマで何をしていたのでしょうか。パウロの生涯を記している「使徒の働き」は、エルサレムにおいてイエシュアが死から復活し、40 日後に天に昇られたところから始まり、天から聖霊が下って教会が誕生します。失敗と挫折の中にあつたペテロをはじめとする弟子たちの上に、約束の聖霊が注がれたことで、大胆に、キリストの福音が宣べ伝えられて行きます。いかなるユダヤ当局の脅かしや迫害にも

屈せず、キリストの福音を宣べ伝えたことにより、教会は前進し続けていったことが記されています。

●そして、パウロがキリストを信じることによって、ユダヤ人から異邦人に対象が拡大するようになります。異邦人にキリストの福音を宣べ伝えるべく神によって選ばれたのが使徒パウロでした。彼は異邦人にキリストの福音を伝えるために、三度の伝道旅行をしたあと、ユダヤ人の陰謀によって捕えられます。しかし、彼が上訴したために、ローマに連れて行かれることとなります。そのローマで彼は、自分の家を借りて住むことができますが、常に、監視されるという軟禁状態に置かれます。軟禁状態ですから、獄中とか牢獄の中に入れられたわけではありません。しかしパウロにとっては、「鎖につながれ」(エペソ 6:19)たも同然でした。

●彼自ら自由にどこかへ出かけて行くということではできませんでしたが、人が彼のもとに来ることは自由にできたようです。そのときの様子が使徒の働き最後に記されています。使徒の働き 28 章 30~31 節を読んでみましょう。

【新改訳改訂第3版】使徒の働き 28 章 30~31 節

30 こうしてパウロは満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、

31 大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。

この時、西暦(A.D)62 年頃と言われています。「使徒の働き」はここで終わっているのです。なぜなら、「すべての道はローマに通ず」と言われたように、逆に言うなら、「すべての道はローマから始まる」とも言えるからです。確かにキリストの福音はローマからヨーロッパ全土に広がって行きました。その後は私たち(異邦人)の番だからです。

●パウロが軟禁状態にあった満二年の間に、パウロは「獄中書簡」(実際は獄中ではなく、軟禁状態であったのですが、なぜか獄中書簡と名付けられています)と言われる手紙—「エペソ人への手紙」「コロサイ人への手紙」「ピレモンへの手紙」の三つの手紙—を書いています。このあとに、つまり二年間の軟禁状態の後に、パウロはいったん釈放されて、スペインの方に伝道旅行に行っているとも言われていますが、再び、ローマに戻ってから捕えられたようです。それから「ピリピ人への手紙」が書かれているのです。その手紙によれば、はっきりとパウロが投獄されているのが分かります。そのために、獄中書簡と呼ばれているのかもしれませんが、A.D.67 年頃には当時の悪名高いネロ皇帝によってパウロは殉教します。62 年にローマに来てから 5 年後、結果的には、彼の上訴は退けられて死刑にされてしまったということになります。

●しかしエペソ人への手紙が書かれた時期には、軟禁状態から解放されることをパウロは信じていたのではないのでしょうか。ですから、このローマにおいて、「私が口を開くとき、語るべきことばが与えられて、福音の奥義を大胆に知らせることができるように私のために祈ってほしい、たとえ、将来も、このまま鎖につながれていたとしても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください」と、祈りを要請したと思われる。この祈りの要請は、同じく書かれたコロサイ人への手紙にも同様の内容で記されています。なぜパウロが「語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください」と言ったのでしょうか。その手がかりとなるものが、実は、ピレモンへの手紙にあるように私は思います。その前に、ここで獄中書簡の内容というか、扱われている主題となってい

るものを整理して置きたいと思います。

- ①エペソ人への手紙・・・「キリストのからだなる教会」
- ②コロサイ人への手紙・・・「教会のかしらなるキリスト」
- ③ピリピ人への手紙・・・「決して奪われることのない喜び」
- ④ピレモンへの手紙・・・「ローマの根幹を揺るがす要請」

●これらの書簡は福音の奥義について実に深遠な内容が綴られているのです。こうした手紙が書けたのも、パウロが宣教の働きよりも瞑想の時間を豊かに与えられたからだと言えます。

●ところで、④の内容を「ローマの根幹を揺るがす要請」としましたが、これはすごいことだと気づきませんでしたか。私は、今回のメッセージの準備をしていてふと目が開かれる思いがしたのです。ピレモンへの手紙はとても短い手紙です。しかし、この手紙にはローマの根幹を揺るがすような「大胆な」ことが記されているのです。いったいどこが「大胆」なのでしょう。

●パウロがローマで出会ったオネシモという奴隷、その奴隷がパウロからキリストの福音を聞いて、信じて全く新しく変えられました。しかしオネシモはもともとピレモン―彼もすでにキリストを信じていたクリスチャンでした―は、一つの家庭集会の責任をもっていたようです。その奴隷がなぜパウロのもとにいるのかと言えば、おそらく、オネシモはピレモンの家で盗みか何かをしでかして、そこにいることができず、逃げ出さなければならなかったようです。当時、奴隷は家畜同然の立場にあって、生かすも殺すも主人の意のままでした。ましてや悪事を働いた奴隷は主人によって殺されても当然の立場でした。ですから、主人を恐れたオネシモが逃亡したのは当然です。ところが、どういうわけか、オネシモはローマに逃げ込み、そこでパウロと出会ったのです。ここにも神の摂理があります。オネシモはキリストを信じて全く新しい人間に変わっただけでなく、むしろパウロにとって役立つ者となりました。そんな彼をパウロは自分の手元に置いておきたかったと思います。しかしながら、オネシモは奴隷であることには変わりがなく、その主人はピレモンということが分かりましたから、パウロはオネシモをピレモンのところに返そうと思いました。でなければ、パウロが泥棒になってしまうわけです。とは言え、パウロは心配でした。もし主人であるピレモンがパウロの申し出を拒否したとするならば、オネシモは命を失ってしまうからです。そこで、オネシモをその主人であるピレモンのところに返すに当たって手紙を書いたというわけです。その内容を一部抜粋して話すと、こうです。

「私たちの愛する同労者ピレモンへ・・・あなたにお願いしたいことがあります。それは、私パウロが獄中で生んだわが子オネシモのことをお願いしたいのです。彼は、前にはあなたにとって役に立たない者でしたが、今は、あなたにとっても、私にとっても、役に立つ者となっています。そのオネシモをあなたのもとに送り返します。彼は私の心そのものです。私は、彼を私のところにとどめておき、福音のために獄中にいる間、あなたに代わって私のために仕えてもらいたいとも考えましたが、あなたの同意なしには何一つすまいと思いました。それは、あなたがしてくれる親切は強制されてではなく、自発的でなければいけないからです。彼がしばらくの間あなたから離されたのは、たぶん、あなたが彼を永久に取り戻すためであったのでしょう。もはや奴隷としてではなく、奴隷以上の者、すなわち、愛する兄弟としてです・・・もしあなたが私を親しい友と思うなら、私を迎えるよ

うに彼を迎えてやってください。もし彼があなたに対して損害をかけたか、負債を負っているのであれば、その請求は私にしてください。私がそれを支払います。」

●このパウロの願いは、当時の奴隷制度にあったローマ社会ではあり得ないことでした。ローマ帝国は奴隷たちの存在によって成り立っていた社会です。その奴隷たちが、キリストにあって、奴隷としてではなく、奴隷以上の者、すなわち、愛する兄弟として受け入れられることは、ローマ帝国を根底からひっくり返すことにもなりかねない、大胆きわまりない発想だったのです。私たちが読むと、なにげないお願いのように思いますが、当時としては大胆きわまりない発想だったのです。やがてローマは皇帝ネロの時代からクリスチャンたちを迫害するようになって行きます。なぜなら、それはローマを支えていたアウトローと呼ばれる奴隷たちにキリストを信じる信仰が広まっていたからです。

## 2. 使徒パウロの大胆さ

### (1) 「大胆さ」ということば

●さて今回は、特に「大胆さ」について心を留めてみたいと考えているのですが、「大胆に」というギリシア語は「パッレーシア」(παρρησια)で、このことばは「すべての」という意味の「パス」(πας)と、「語ること」を意味する「レーシス」(ρησις)という二つのことばが合成された語彙です。「すべての語るべきこと」「語るべき言葉をすべて語ること」・これが「大胆さ」ということばの意味するところです。ちなみに、「大言壮語」は、内容のない虚実なことをあたかも本当であるかのように大げさに語ることで、**「大胆さ」にはまさに、語るべきことをすべて、しかも命がけで語るという意味合いがあります。そしてその「大胆さ」は、初代教会においては迫害を受けることを意味したのです。**

●パウロという人は、キリストを信じてから、すぐに、実に「大胆に」福音を伝えた人です。そしてその生涯の最後まで、キリストの福音の奥義を「大胆に」語り続けた人です。しかし、この大胆さは決してパウロの専売特許ではありません。すでに、エルサレムで主を信じた弟子たちが「大胆さ」において目立っていたのです。律法学者であったパウロは、本当の意味での律法を守ることができないにもかかわらず、自分は守っていると思い込んでいた、言わば「大言壮語」している人々の一人でした。しかし、キリストの弟子たちは違いました。神のことばと神のご計画を正しく理解し、しかも、確信をもってそのすべてを聖霊によって語ることでできていたのです。そしてそこにいのちをかけることのできる人たちでした。それは律法学者たちにはなかったものでした。

#### 〔例証①〕

「彼らはペテロとヨハネとの大胆さを見、またふたりが無学な、普通の人であるのを知って驚いたが、ふたりがイエスとともにいたのだ、ということがわかって来た。」(使徒の働き 4:13)

#### 〔例証②〕

「主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。彼らがこ

う祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだした。」

(使徒の働き 4:29, 31)

〔例証③〕 ステパノの殉教が青年パウロに与えた影響

●このような流れの後で、初代教会の最初の殉教者ステパノの話がきます。イエシュアの弟子のひとりステパノは教会の様々な配慮をするために執事として選ばれた人です。彼は律法学者でもないのに、聖霊に満たされて、旧約聖書で語られている神の救いの計画を、信仰の父、イスラエルの父として尊敬されたアブラハムからはじめてイエシュアに至るまで、見事にそれを説明することができた人でした。そして神が遣わされた神の御子イエシュアをあなたがたは裏切って十字架につけて殺す者となったと述べたとき、人々は、はらわたが煮え返る思いで、ステパノに向かって歯ぎしりして、耳をおおい、石で彼を打ち殺そうとしました。ユダヤ人たちが彼に石を投げつけていると、ステパノはひざまずいて、大声で「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」(まさに十字架上のイエシュアと同じです)—こう言って、彼は眠りにつきました。教会がスタートして最初の殉教者です。

●このステパノの殉教の血は決して無駄にはならず、むしろやがて多くの実を結ぶことになるのですが、この大胆に語るステパノの説教を目の当たりにした一人の青年がいました。その青年こそ、後の使徒パウロなのです。おそらくこのとき、パウロは大きなショックを受けたと思います。強烈なフックパンチをくらったと思います。そしてその後すぐにキリストによる直接のカウンターパンチを受けてノックアウトされるのですが、その前のフックパンチがかなり効いていたはずだと私は考えています。

## (2) 弟子たちの「大胆さ」の特徴

●初代教会のイエシュアの弟子たちの特徴は「大胆さ」にありました。そこには、

- ① 確固とした確信
- ② 上から与えられる勇氣
- ③ 死をも厭わない殉教精神

・・・を見ることができます。

●パウロが初代教会のクリスチャンたちに見た姿は、そうした大胆さでした。こうした大胆さは、私たちがこの世においてクリスチャンとして生きる上で大切なことではないでしょうか。

- ① パウロの回心から生涯の終わりまでの一貫したパウロの態度
- ② 神の福音を伝える上での必要不可欠な精神
- ③ 人間的な頑張りからのものではなく、上から与えられる聖霊の力。

●ちなみに、「大胆に」ということばは、面白いことに旧約聖書にはたった一度だけあります。それも「大胆に悪事を働く」という言い方ですが、新約聖書の弟子たちの生き方を指し示す言葉としては使われてはいません。新約聖書の福音書にもこの言葉はひとつも出てきません。最初に登場するのは、「使徒の働き」です。しかも、「使徒の働き」に登場するイエシュアの弟子たちは、完全に自分の力に失望した者たちです。そこから使徒の働きは始まっています。これはとても意味のあることです。つまり、弟子たちの「大胆さ」は決して彼らの生まれなが

## אגרת שאול אל האפסים

らの性格でも、気質でもなかったということです。頑張りでもなかったということです。上からの力、聖霊の力なしには、「大胆に」生きることはできなかつた者たちなのです。このことは、私たちに大きな希望を与えます。エペソの教会の人々に「語るべきことを大胆に語れるように」祈ってほしいというパウロの祈りの要請は、ことばを換えるならば、上からの力で満たされるように祈ってほしいということでもあるのです。

●では、ここで一つ質問したいと思います。新約聖書でいう「大胆に」という言葉を、旧約聖書にある表現を使うならばどういう言葉になるのでしょうか。考えてみてください。

.....

答えは、「雄々しくあれ、強くあれ」です。

### 3. パウロが祈りを要請した「大胆さ」

●私たち日本人は、神よりも人を恐れます。人の目を気にします。そんな私たちが聖書に見るキリストの弟子たちのように、「語るべきことを大胆に語る」弟子となるためには、聖霊によって自分に与えられている救いの確信が不可欠です。私たちが神の子であることを、クリスチャンであることを恥と思うようなことはないでしょうか。恥とって自分がクリスチャンであることを隠すようなことはないでしょうか。

●人を恐れることなく、自分が神の子とされていることを、確固とした確信をもって生きるために、祈り合う必要性はないでしょうか。そのような確信は自分の頑張りからは生まれません。上からの賜物です。その賜物を頂くならば、「大胆」な生き方をすることができるようになります。人を恐れない者となります。「雄々しく、強く」あることができるのです。そのような生き方ができるように、あなたは祈ってもらわなければならないのでしょうか。教会はそのために祈り続ける必要があるのではないのでしょうか。そのようなことを思いながら、今回のパウロの祈りの要請に、再度、耳を傾けたいと思います。

【新改訳改訂第3版】エペソ人への手紙 6章 19～20節

19 また、私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるように私のためにも祈ってください。

20 私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。